

<エッセイ>日本が私にもたらした予想外の人生の展開は、「縁」であり「恩」である

著者	グエン ヴー・クイン・ニュー
雑誌名	日文研
巻	57
ページ	15-21
発行年	2016-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00006493

日本が私にもたらした予想外の人生の展開は、
「縁」であり「恩」である

グエン・ヴー・クイン・ニュー

①両親の反対を押し切って始めた日本語学習

一九九二年、ホーチミン市総合大学（現・ベトナム・ホーチミン市国家大学ホーチミン市人文社会科学大学）の英語専攻を卒業した私は、その数年後、ホーチミン市に「南学日本語クラス」が開設されることを知り、英語での受験が可能だったため、親に内緒で受験した。幸いなことに合格したが、当時私は、日本語はもとより、日本がどういう国なのか、「南学日本語クラス」とはどんな組織なのかについても全く知らなかった。現在のベトナム人の若者に「日本語学習目的」を聞くと、「漫画を読みたい、日本に留学したい、日本企業で働きたい」等、はつきりと答えることが多い。しかし、当時の私は、日本に対するイメージというものはもっておらず、日本や日本に関連した資料、図書等もほとんど無い時代であった。ベトナムに進出していた日系企業も非常に少なく、インターネットもなかったので、情報は非常に限られていた。しかし、「南学日本語学校」は入試の倍率が高く、この「狭き門」に入ることができたことは、自分に來た一度だけのチャンスと思い、仕事は辞めて、日本語を勉強することに決めた。ところが、入学する直前になって、親から強く反対された。全く知らない国の言語、しかも目的なしで勉強することは意味がない、と反対されたのである。卒業できたとしても、働ける

日本企業が少ない中では就職困難だろう、と言われた。将来の生活は見えないけれど、「ようやく得られた機会だから、一生懸命頑張るから」と親を説得した。

同年九月の南学日本語クラス第二期生の入学式には、応募人数四〇〇人の中から合格したその他一七人とともに私がいた。日本との出会いは、次々と「花が咲くように」開いていた。二年間の全ては「南学の精神」のご指導と、親からの犠牲から成り立っており、日本との出会いの始まりは、「縁や恩が絶えないもの」だと感じていた。

②総領事館の仕事をしながら修士課程をやりとげる

南学を卒業した一九九四年は、日本の対ベトナム援助が再開された二年後であり、ベトナムへ進出する日系企業が増えていた頃であった。その四年後、在ホーチミン日本国総領事館の職員採用試験を受験した。幸運にも採用され、総領事館の中でも広報文化班というところで仕事をするようになった。日本という国、文化、人々のことをより深く理解できるようになり、やりがいがあった。本当に良かったと思う。

そして二〇〇三年、たまたまホーチミン市人文社会科学大学の修士課程募集要項を見かけ、受験し、合格した。二年後、「日本の伝統演劇」のテーマで修士号を無事に修了することができた。総領事館の仕事をしながらの研究は本当に苦労の連続だった。総領事館では、歴代の総領事や広報文化班長だけでなく、他の日本人の職員の方々からも、公私にわたり沢山の応援を頂いたことに感謝している。

③俳句研究…ベトナムで行うのは無謀なことなのか？

修士課程在学中には、ここではなかなか書けない大変なこともいろいろ起こっていたので、修士号を取得した際、「もうこれ以上は勉強するものか」と誓った。しかしその三年後、二〇〇七年には、何か新しい日本の文化を紹介する提案をしなくてはならなくなり、色々と日本の文化に関する本を読んでいた際、偶然俳句に出会った。

「古池や蛙飛び込む水の音」(松尾芭蕉)

言葉自体は簡素なのに、意味されるところが全くわからない。では、どうしてこれが世界で流行っているのか、何が魅力なのか、好奇心が湧いた。ああそうか、これまで俳句はベトナムでは紹介されてこなかった。ベトナムでやってみないわけにはいかない、と思ったのである。俳句をベトナムにも伝えたいと思うならば、一七音詩の重大な本質である「季題詩」というものを顧みることを期待したい。二〇〇七年の夏に、総領事館とトゥオイ・チャー(若者)紙と共催して、ベトナムで初めての「日越俳句コンテスト」の開催を決定した。

しかし、どれだけの人たちが俳句を知っているのか、コンテストに応募してくれる人はいるのか、非常にドキドキした。ところが、その不安を覆すように、数百人の四千句にも及ぶ俳句(ベトナム語部門と日本語部門合わせて)が応募されてきたのである。ほっとした半面、好奇心も湧いてきた。なるほど、理解のレベルは別として、ベトナムでも俳句はある程度知られているのだと。

私自身俳句についてあまりに知らないことが多いと痛感していたので、その一年後、ホーチ

ミン市人文社会科学大学博士課程を受験し、幸いにも合格した。その頃、日本に留学している友達がベトナムに帰国し、私のお祝いをしてくれた。しかし、彼に会った瞬間、「何をするつもりなの！ 馬鹿なこと！ どうしてベトナムで俳句を研究するの？」と強く言われたのである。仕方がない。もはや頑張るしかない。でも俳句に関する日本語の本を読んでも分からないことばかりである。言葉は難しいし、俳句の表現、内心やイメージを理解することはもっと難しい。本当にバカなことをしてしまったと思って後悔さえした。しかし、俳句を研究すればするほど、確かに難しいのだけれど、その簡潔な詩に込められた奥深い内容に魅了された。その五年後、二〇一三年の夏に、ようやく『俳句・発祥・発展の歴史及び詩形の特徴』の博士論文を完成させ、無事に発表を終えることができ、博士号を取得することができた。

④ 日文研・日本との深い縁

二〇〇九年に、日文研を訪問する機会に恵まれ、稲賀教授より図書館等を案内して頂いた。こんなに綺麗な立派な図書館や研究所で研究できるのは夢でしかないとその時は思っていた。

ぼんやりと公園で待つ子の日永

二〇一三年一月、日文研の倉本一宏教授、劉建輝教授、白幡洋三郎教授が総領事館を訪問された。ホーチミン市における日本研究事情等を説明していた時に、先生方より外国人研究員のプログラムの紹介をして頂いた。かつての夢を思い出した。その後、日文研の外国人研究員に応募したいという希望を持ったので、倉本教授に連絡を取った。先生より様々なご指導を頂い

た上で、書類を提出した結果、またも幸運なことに採用されることができた。二〇一五年九月より国際日本文化研究センターの外国人研究員として「現代日本社会における俳句の変化」を研究している。

日文研に来てから自分の夢は現実になっている。日文研の小松所長、倉本教授をはじめ、大勢の教授より様々な貴重なご指導やアドバイスを頂き、俳句の研究資料収集や俳人の紹介等もして頂いた。日文研ハウスは、静かなところが大好きな私にはとても相応しい所である。寒さに弱い私には京都の冬場は辛かったが、四季のある日本に滞在することや、京都の伝統的な文化や風景を楽しむことができた。

冬の夜や温かくなる母の声

研究の面では、著名な俳人である松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、正岡子規などの史跡、記念館、句碑、誹風を訪ねたり、絶景として知られている松島や東北地方などを訪問し、俳句ならではの魅力、楽しみに触れることができた。

冬ざれの芭蕉の松や浮御堂

菜の花や平泉町小家かな

訪れた街では、自然の風景や町の姿を旅した思い出を残すために、句を作詩した。私にとつての「俳句の日記詩」の作品をぜひこの機会にお楽しみください。

地すべりに松ゼミ鳴きぬ中尊寺

二日酔い蝶と私もゆらゆらと

また、世界俳句協会や国際世界交流協会を訪問し、俳句の国際的な普及状況等を調べた。そして、俳句の研究状況や俳句の大衆化について理解するために、俳句講演会や俳句ラボを受講したりもした。日本の句会を経験するために、さまざまな句会にも参加した。

いつまでも余花揺らしけり山の奥

句会で初めて日本語で作詩し、選句することにより、日本人の季節感をより理解することができたように思う。また、日本の俳句の美意識とベトナムの俳句にもある精神の美しさの相違点があった。

けあらしに水際知らぬ声を出す

この句は（私にとって）昨年が一番寒い時に作詩したが、その後、「けあらし」という季語は、北海道のような極寒地であって初めて理解されるイメージだということを、今年の五月に北海道の俳句集団「[俳句]」を訪問した際に初めて知った。確かに、俳句を理解できるようになるのは難しい。でも、難しいということできえ魅力的だった。

⑤ 来日の初の印象

来日の直後に、東京に研究出張があった。日文研からの京都駅行きのバスから降りて、東京行きの新幹線の改札がどこにあるのか分からなかった。バス停で待っている人に聞いてみると、新幹線の改札まで案内してくれた。よく道に迷った私は、いつでもどこでも、私が行きたい場所まで一緒に連れて行ってくれる人に出会うことが有難いほど多かった。来日前に、日本人は冷たいとよく言われたが、知らない人にそんなに親切にして下さったのは信じられないほど感動した。良い思い出であった。

また、とても便利な交通手段である新幹線や、電車等のおかげで、色々なところへ研究に行くことができた。どこの駅にも「観光案内カウンター」があり、そこで地図をもらったり、情報等を聞くことができた。日本での生活は便利で安全だ。交通機関を發展させようとしている私の国では、いつ出来るのだろうか、新しい夢を見ている。

ちっぽけな詩は、私に幅広い世界へ旅する扉を開けてくれた。これまでの人生を振り返ってみれば、日本との出会いは、私の人生に「ある時からある時へ」移行するための重要な転換期を生んでくれた。最初はベトナムの若手人材育成への援助の「南学精神」に則った日本語学習、次は「総領事館で働いたことによる日本文化の価値の理解」。そして「人生をかけた俳句研究」を通して、様々な日本での体験や出来事、大切な人との「深い縁」をつないでくれた日文研に対し、私はとても「返し切れない恩」を抱いている。それゆえに、これからも日本と私を結んでくださるだろうか、思わずにはいられない。

(在ホーチミン日本国総領事館広報文化班アシスタント)

国際日本文化研究センター外国人研究員)